

“患者補償を早急に”

文化人ら 水俣病でチツソ追及

東京・丸の内の子ッソ本社（島田賢二社長）ですわり込みを統

括している水俣病新認定患者・家族七人を木下順二氏、市川房枝さん、望月優子参院議員ら文化人八人が十四日午後見舞いに訪れた。市川さんらは社長室前の廊下で車座になり、患者の水俣市月浦、川本輝夫さん（60）らの訴えを聞いたあと、会議室で久我正一チツソ取締役、土谷栄一総務部長と話し合

った。

ヘドロ公営で大昭和製紙とたたかっている富士市の公害対策市民協議会会長、甲田寿彦さんが「心身とも不自由な患者が一週間もすわり込みを続けている状態は不幸で悲しい」と切り出し、続いて評論家の秋山ちえ子さんが「会社の人が親身になっていれば、もっと早く解決できたでしょうに。人間

としての誠意が足りないのでは」と聞いたのだした。

市川房枝さんは「ともかく患者のみなさんが早く家に帰って療養できるように、補償を中央公害審査委員会に持ち込むのをやめませんか」というと「ご批判は率直に受けますが、いろいろ経緯がありますので」と煮えきらない返事で、会見はすれ違いに終わった。



患者たちから話を聞く木下順二さん（左）と市川房江さん（右）ら文化人